

研究主題「伝え合う力を高め、お互いの立場や考えを尊重できるようにするための指導の工夫～国語科におけるインタビュー活動をきっかけとして～」

東京都教職員研修センター研修部企画課
府中市立若松小学校 教諭 山元 敬子

研究の背景とねらい

現代社会では、情報化が進展し膨大な情報が氾濫している。こうした時代を生きる子どもたちは、必要な情報をつかみ、まとめ、発信する力が要求されている。小学校学習指導要領国語の目標にも、「適切に表現し正確に理解する能力」の育成を基盤に「伝え合う力を高める」ことが位置付けられている。

一方、現状は人間関係の希薄化の傾向もみられ、家庭と地域とのつながりが薄くなり、子どもたちは限られた人間関係の中で過ごす時間が多くなった。そのため、社会生活と人間関係形成に不可欠な話し言葉の運用能力を育成する機会が少なくなってきた。そこで、本研究では児童が生涯にわたって豊かな人間関係を形成したり維持したりしていくために不可欠な言語能力の基礎を養い、伝え合う力を高めることをねらいとし、指導の工夫について考察した。

仮説 いろいろな相手や目的に応じたインタビュー活動を設定し、相手に応じた言葉遣いや、目的意識をもって話を聞くことを身に付ければ、伝え合うことに自信をもち、相手の立場や考えを尊重する態度が養われるであろう。

児童が国語科の学習の中で身に付けた言語能力を日常生活の中でも生かせれば、豊かな自己実現に生きて働く言葉となると考え、研究を進めることとした。

研究の内容と成果

1 基礎研究

(1) 主題と答申等との関連

研究主題である「伝え合う力」や「お互いの立場や考えを尊重できる」ことをより明確にするため、文化審議会答申、中央教育審議会答申等から主題と関連する事項をまとめた。その結果、「社会生活と人間関係形成に不可欠な話し言葉の運用能力の育成に取り組むこと」、「豊かな人間性、自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心を育てること」等、また人権教育の視点から「他人との共生・共感の大切さを真に実感できるような啓発を推進する必要がある」等が大切であることが明確になった。

(2) 学習指導要領国語「話すこと・聞くこと」の領域のまとめ

内容が系統的・段階的に示されており、小学校の学習内容がらせん的に中学校・高等学校でも繰り返され、一層高めることをねらいとして設定されている。小学校では、その基礎の確実な定着が大切であることが明確になった。特に小学校第5・6学年と中学校第1学年に関連する内容が多く、このことを意識して指導していくことが必要である。

(3) 先行研究、インタビュー技術にかかわる文献の整理

先行研究、文献等から「話すこと・聞くこと」の効果的な指導法を整理し、インタビュー活動を通して期待できることや指導する際の留意点を活動前・中・後に分けたことは、インタビューの基礎を押さえるために有効であった。また、心理学にかかわる文献からトレーニ

ング法や人間関係に関することを整理し、コミュニケーション能力を高めることの具体的な方策が得られ、児童の支援に生かすことができた。

2 授業研究

言語運用能力とは「音声言語・文字言語を問わず、相手や目的・場面に応じて自らの意思を言語によって適切に表現・伝達し、かつ言語を通して相手の意思を的確に理解し得る能力」(第20期国語審議会審議経過報告から)

(1) 仮説に対する方策

仮説を検証するため、言語運用能力を身に付け高めることにより、伝え合うことに自信をもち、相手の立場や考えを尊重する態度が養われると考え、以下の2つの授業を計画した。

インタビュー活動で言語運用能力を身に付けること

第5学年国語科単元名「インタビュー名人になろう」		全5時間(9月実施)
目的	<ul style="list-style-type: none"> 相手に応じた言葉遣いや、目的意識をもって話を聞くことにより、言語運用能力を身に付ける。 インタビュー活動で学んだことを次の学習に生かすことができるようにする。 	
策	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな相手や目的に応じたインタビュー活動を設定し、話すことに対する意欲を喚起させ、方法を理解できるようにする。 インタビュー活動の前・中・後を通して身に付けたい力を設定する。 	
	インタビュー活動で身に付けたい力	
	前	<ul style="list-style-type: none"> 相手の立場に立ち、インタビューを受ける人の気持ちが理解できるように質問の骨子を考えること。
	中	<ul style="list-style-type: none"> 相手が答えやすい雰囲気を考え、質問が相手に話しやすく自分が得たい情報を引き出せるようにすること。 相手に聞き取りやすい発声や速度を心がけること。 相手の発言を聞こうとする態度を養い、その内容を理解して聞くこと。 相手の話を的確にメモすること。
後	<ul style="list-style-type: none"> インタビュー後のお礼のあいさつ等、礼儀を身に付け、お礼の表現方法を理解すること。 まとめたインタビュー内容を表現すること。 	

情報を収集・選択・発信し、言語運用能力を高めること

第5学年国語科単元名「伝え方を工夫してニュースを発信しよう」		全13時間(12月実施)
目的	インタビュー活動で身に付けた言語運用能力を生かし、他教科等とも関連させて、自分に必要な情報を収集・選択・発信する。	
策	相手の意図を考えながら聞いたり、自分の考えを明確にして話したりすることができたかどうかをワークシート、児童観察、録画記録等から検証する。	

(2) 検証結果

第1回で身に付けた言語運用能力を生かし第2回で高めるように工夫した手だてを設定した。

インタビュー活動で言語運用能力を身に付けるための手だてについての検証

a 視点の明確化	インタビュー活動に取り組むための4つの視点(言葉・話し方・態度・表情)を設定し、自己評価・相互評価のとき、その良さを明確にして発表したりワークシートに書いたりできるようにした。
----------	--

自分の課題を振り返り、ワークシートの視点を基にインタビューを自己評価・相互評価することができた。

(具体例)これまでの経験の中で声が小さく話がとぎれてしまうため、インタビューに自信がない児童が71人中23人いたが、DVDを見て言葉だけでなく態度や表情でも相手とかわかることに気付いた。非言語活動も意識してインタビューを行うことにより、初めて会う大人にインタビューした10人全員がインタビューに自信をもって取り組むことができた。

b 機器の活用	プロのインタビュー活動や児童のインタビュー活動をDVDに録画したものを視聴した。
---------	--

良さに気付き、めあてをもってインタビュー活動に取り組むことができるようにした。

(具体例)Aさんは、プロのインタビューの様子を見て、相手の話を受けて返すための態度、質問をつなげるための言葉を自分の参考に使っていた。

c ウェブマップの活用	事前に、インタビューしたい内容をウェブマップで書き表し、準備の大切さを理解できるようにした。
-------------	--

インタビューしたい内容をウェブマップに書き表し、質問したいことを事前に整理することができ、質問が相手にとって話しやすく、自分が得たい情報を引き出せるよう工夫していた。

d 相手・場の設定

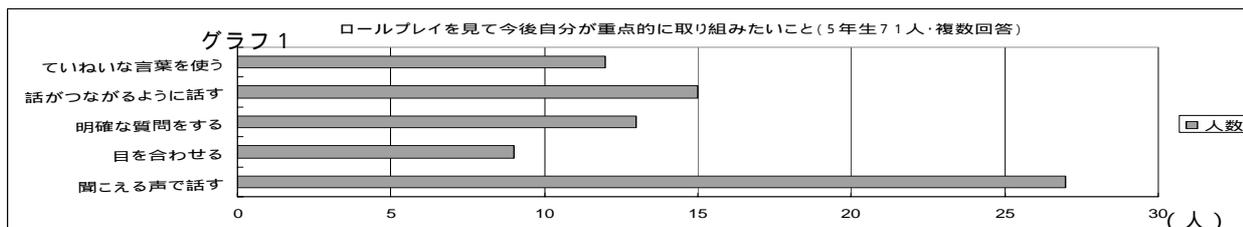
インタビューする相手や目的を児童から初めて会う大人へと発展した。

インタビューを場に応じて行い、更にいろいろな場面で行いたいという意欲を高める。
(具体例) Bさんは、自分自身が今まで学習したことや生活を振り返ってインタビューすると、新しいことが引き出せることに気付いた。友達同士でもこれまで知らない一面が分かったので、初めて会う大人に対してのときは、さらに話を引き出して、自分の知識を広げようと意欲的に事前学習して話していた。

e ロールプレイング学習

児童から出た課題を基にインタビューするとき大事なことを確認するロールプレイングを行った。

実際に演技することでインタビューの仕方や進める方法が具体的に分かりやすくなった。



情報を収集・選択・発信し、言語運用能力を高める手だてについての検証

a 相手・場の設定

他教科や学校行事等と関連させ、学んだことや経験したことを生かし、自分の考えをもてるようにした。

学んだことや経験を生かし、ほとんどの児童が課題について事前に調べていた。

(具体例)身近な友達やより多くの人に知らせたいという願いをもち、地域の環境市民発表会へ向けて出場意欲を高めていく児童もいた。

b 説明的文章の活用

説明的文章を読み、放送原稿の組立てや記述に注意して効果的な読み方・書き方の特徴を理解させた。

放送原稿の書き方の特徴について、ワークシートを使って練習したので、説明的文章で学んだ原稿の書き方を基にして伝えたいことを明確にすることができた。

c 原稿のまとめ方

校正がしやすく読みやすい原稿用紙を活用し、記事をグループや他グループで読み合い、互いの記事のよさに気付かせるようにした。

発表原稿をグループの中で意見を出し合って作り、他のグループと互いに読み合い、相手の意図を考えながら聞き、互いのよさを見付けることができた。

d 繰り返し学習

4つの視点(言葉・話し方・態度・表情)をインタビューするときだけでなく発表する際も活用した。

繰り返し学習することによって、学んだことを生かし、さらに自信をもって活動していた。

(具体例)インタビュー中、多くの児童が視線を合わせて話すことや礼儀正しい態度で話すことの大切さを再認識した。発表するときは、どのグループも相手にわかりやすく話すことを意識した。また、日常生活でも同じように場に応じて礼儀正しく優しく話せば相手も気持ちよく答えることがわかり、自分の生活の中でも生かそうという気持ちが育っていった。

e 機器の活用

DVDに録画した児童のインタビュー活動の様子を視聴した。

相手に伝えるだけでなく、自分たちやお互いが活動を振り返ることができた。

原稿を書くための練習教材として活用し、話のポイントを押さえた記事にまとめた。

(具体例)友達のインタビューの様子を見て自分たちとは違った視点で尋ねていることに気付いた。また、他の学年にもわかりやすく知らせたいという願いをもち、校内テレビ放送のときは話すだけでなく図表や実物を使って発表した。

(3) 検証の成果

説明的文章を通して、放送原稿の書き方の基本を身に付けたので、自分でワークシートに書き込みながら、理解を深め意欲をもって取り組んでいた。言語運用能力を高めるためには、書くことや読むことの領域と関連させ、話すこと・聞くことの基礎・基本の定着を図ることが大切なことが明確になった。

インタビュー活動は「話すこと・聞くこと」だけでなく、「書くこと」、「読むこと」とも関連する。この活動を国語科の学習の中に盛り込み、学習活動を活性化し、言語運用能力を身に付けることができる。他教科等の関連を図ると、さらに言語運用能力を高められることが分かった。

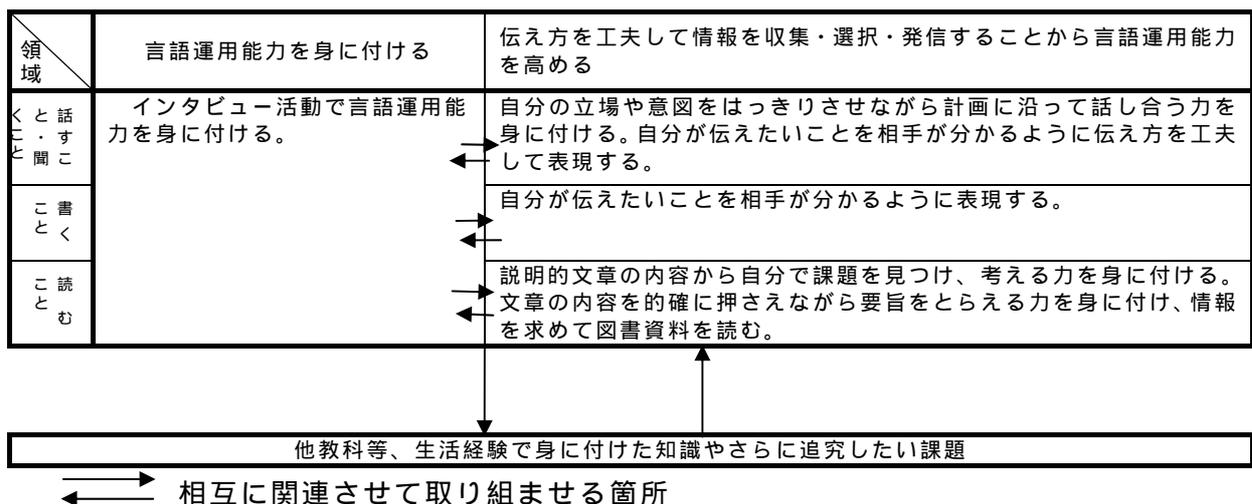
言語活動だけでなく、非言語活動にも着目することで相手の立場や考えを尊重していこうとする気持ちが高まっていくことが明確になった。

インタビュー活動を通して、児童が国語科の学習の中で身に付けた言語能力を学校生活だけでなく、家庭や地域の中でも生かすことで、自信をもって人とかかわろうという気持ちが育ち、伝え合う力をさらに高め、行動することができた。

3 指導計画の作成

二つの授業研究を基に、身に付けた言語運用能力を他教科等と関連させ、さらに日常の言語活動を生かして人間関係調整能力を高めていくことができるような指導計画を作成した。学習指導要領解説にある「聞きたいという必要感や聞かねばならないという必要感を実感できる学習の場を設定する」を重視した。多様な場と相手に対し、適切で効果的な組立てや言葉遣いなどに注意しながら、話の内容を聞き取ることができるように設定している。相互に関連した教科、行事等を組み合わせることで、学んだことが生かされるよう意識した指導計画が必要である。

表1 インタビュー活動をきっかけとして国語科で身に付けたい力と他教科等との関連



今後の課題

他教科等の指導と国語の指導との関連を図ることにより、さらに多様な場を設定し、相手・目的を明確にしたインタビュー活動を行い、言語活動を高めていく。

家庭、地域等と交流を進め、学校と地域社会との双方向の活動を生かすことで、児童に心豊かな言語環境を作るような方策を考える。